

て活躍してゐる様子が伺はれるのは注意すべきことである。戦陣にある敵も味方も、その戦術の中に、廣く深く天文學術を應用してゐることは驚くばかりであつて、實に、今日は、天體に據らなければ、戦闘が實施され得ない状態であることは、特に太平洋を舞臺とする“大東亞戦争”に於いて著しい。この事實は、天文學徒も、アマチュアも、教育者も、政治家も、一般社會人士も、よく知つて居なければならない。

資材の上から言つても、大小の望遠鏡の類や、クロノメータなど、又、數理計算器具や、學術研究文獻などに至るまで、皆、今日の特殊な時局の影響によつて、或る種の動きを見せてゐる。東西各地のプラネタリウムにも、戦時色が溢れ、特殊な研究者のあわただしい出入が認められる。詳細なことは、こゝに記述することが出来なけれど、讀者は此の短文の行間に或る空氣を感得せられんことを望む。——すべては戦力増強のために捧げなければならぬ。しかるに、この戦時に、曆を改めて、世間の生活を混亂に陥らしめようと企ててゐる輩が存在してゐる。これ等は、世間の迷惑を顧みず、又、現行のグレゴリオ曆の著しい長所から眼をそむけて、必要もなき些細な變革を計畫しつゝあるやうであるが、およそ改曆についての吾人の態度や主張は既に度々本誌上に述べたところであるから、讀者は決して迷はされざるやうに注意して頂きたい。(新しい讀者諸君は、改めて天界第 225 號の拙文を熟讀せられよ。)

瀧山氏の艦座新星發見事情

〔瀧山氏の新星發見が重大な事實であることは、上記の主幹者の卷頭文にある通りである。編輯部では、七月初め、早速、同氏に手紙を送つて、發見の當時の詳細な事情を報告されるやうに依頼した。すると、同氏から下の如き文が主幹あてに送附された。これを讀んで見ると、同氏が栗原氏から南方の星座案内を書くことを依頼されてゐたといふのが非常に重要な點であると思はれる。——編輯〕

山本先生、

(前略) 新星のこと思ひ出してみますと、大體次のやうな様子です。

昨年十一月十日頃、丁度、胃腸カタルがひどくなつて、5—6日學校を休んで寝てゐた時でした。7日からどうも身體の調子がわるくなつて、8日から休んだその朝、三時から四時頃だつたと思ひます。下痢のため便所へ起きた時、腹痛を我慢して、便所の窓から南の空をフト眺めたのです。丁度その時は「星の會」の栗原正雄君から、大犬座の星座案内の原稿を書いてもらいたいとのまれておましたので、何となく氣にかゝつて、大犬座あたりをみました。空はよく晴れてゐて、とても寒かつたのです。オリオン座はずつと西へかたむいてしまつ

て、大犬座も少し西へかたよつておりました。それから、縁側の戸をあけて、ずつと南の空を見わたして見ました。(屋根のため、あまり下の方は見えませんが、それでもかなり下の方まで見えます。)すると大體、眞南の艦座の中で、『エジプトのX』でわかる艦座のく星(二等星)の少し上あたりに、一寸見えない大きな星がありました。(エジプトのXといふのは、僕はずつと以前からヤング教授の“Uranography”の中でよんで、面白く思つておりました。先生の“星座の話”の中にもこれが出ておりましたので、一層興味をもつておます。これで艦座のく星はよく知つておます。)

光はシリウスよりは少し弱いやうに思ひましたが、よくわかりません。近視のため、眼鏡をかけてはおりましたが、はつきりとはわかりませんでした。プロシオンよりは少し強かつたやうな氣がします。大犬座の三角形の各星や、艦座のく星よりは、輝いておりました。色は白いやうでした。

あとから思ひ出しますと、こんなやうでしたが、この時は少しの間しか見ませんでしたので、あまりたしかでもありません。妙な星だとは思ひましたが、まさか、こんな大きな新星の現はれるまで、誰も氣がつかなくかつたとは思ひませんでした。何しろ、腹痛のため、我慢出來なく、別に氣にもとめずに、そのまますぐに寝てしまひました。

その後、ずつと寝てばかりゐて星のことを考へませんでした。13日ごろから大分よくなつて、14日に大事をとつて、もう1日休み、15日から學校へ行きました。星が出てゐるのを新聞に見たのは、14日の晝ごろで、13日附だつたと思ひますが、前の新聞に出てゐるのを見たのです。寝てゐる間は一枚も新聞を見なかつたのが残念でした。(尤もそれどころではなかつたのですが。)見てびっくりしました。きつとあの星だと、すぐピンと來ました。報告をしようかと思ひましたが、元來、氣の小さい性質で、今では報告をしてもしやうがないし、もうおそいと思ひ、あきらめました。それから、念のため15日朝に見ようと思ひましたが、残念なことに寝すぎてしまつて、眼のさめた時は六時半でした。16日は三時か四時ごろにうまく眼がさめて、おきてみました。雲が多く、よくは見られませんでした。どうやら二等星位になつてゐるのを見ました。たしかにあの星のあつた所で、く星の少し上でした。その時、光はく星よりはまだわづかに強いやうでした。

16日に、それで、もうおそいではありましたが、思ひきつて、少しでもお役に立てばと思つて報告しました。

先生の御調査の結果、この新星を見たことが重大であると言はれて、少しでもお役に立てば幸ひです。話によりますと、外國でもこの新星を見たのは9日が最初であるさうですが。

昭和十八年七月七日 瀧山昌夫